

計画案の夢

アンビルド・プロジェクト

アトリエCOSMOS
'93~'95

②

六浦谷戸計画

文=白鳥健二

写真=大橋富夫

六浦谷戸計画（3棟の建売住宅計画）

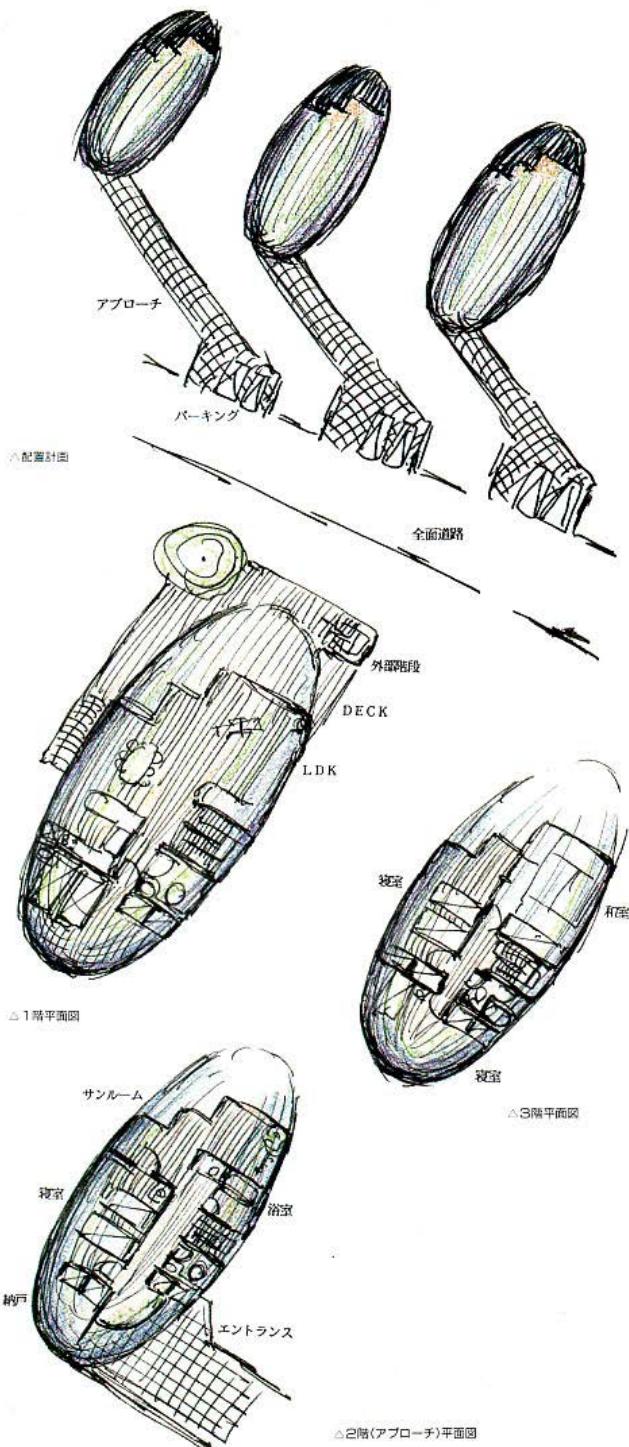
——谷間に三つのタマゴを生み落とす——

静かな谷戸にタマゴを生み落とす、
大、中、小、三つのタマゴを生み落とす、
最初は、大きいタマゴをひとつ、
次に、中位のタマゴをひとつ、
そして小さいタマゴをひとつ、
更に小さいのをもうひとつ……と思ったが、
うへん
最後のひとつを生み落とす場所がない、
うへん
最後のひとつを生み落とす気分になれない、

静かな谷戸にタマゴを生み落とした、
描録状の緑の谷間に三つ生み落とした、
無意識のうちに生み落とした、
一瞬のうちに生み落とした、
——私のスケッチノートより——

“古代インドのウバニシャッド哲学によれば、自己の究極の存在を「我（アートマン）」と考えていた。この「我」は同時に大宇宙の真理であって絶対者である Brahman（成長するの意）と同一のものと考えられていた。これに対して、仏陀による仏教は、「永遠に滅するとのない常なる主観的な自己はどこにも存在しない。ただ存在するのは一瞬一瞬に生じては滅し去る自己の相転体があるに過ぎない」とする「無我（アーナトマン）」を説いた。これ等の矛盾を解決したのが唯識思想であり、つまり輪廻の主体を「識」と考え、「我」＝「輪廻」と説く仏陀の「無我」の思想が代りされた。キリスト教の「善惡の二元論」に対して、善でも悪でもない「無記」あるいは「識」を示している（黒川紀章『共生の思想』より）。つまり、もっとも新しいものが発生する環境とは無我的境地、すなわち無意識の時だ。しかし無意識の状態とは、ほんの一瞬の刹那であって、次の瞬間、「我」、つまり意識にとって代わられる運命にある。この一瞬が LATEST で、もっとも MODERN のである。

MODERN という最先端の時代区分は、ほんの刹那の一瞬を指すもの。後の残りは膠着化した時間の墓場のような空間なのかも知れない。黒川紀章氏の示している「識」とは、「我」でもない「無我」でもない、「無記」、意識でも、無意識でもないもの、「識」。それは、二つのものの存在を超越した世界、「無双」。桜沢如一氏の示すところの大極の世界かも知れない。



前にも述べたが、私はポストモダンとは無縁の人間だと思っていたし、未だにそう思っている。ポストモダンの是非をめぐる議論はこの際別として、そもそも、MODERNとは、①近代的、②新式的、③現代的と標記する。一つの MODERN とは、NEW STYLE、NEW AGE のカテゴリーを指している。POST MODERN とは、MODERN の次に来る (COMING) 新しい時代区分とは違い、むしろ形態化した現代、つまり、MODERN の本質が去った後 (GONE) の膠着化した脱現代の象徴と位置付ける人も居る。もっとも新しいもの (LATEST) がもっとも現代的である。

建物は日照、通風、眺望、そして環境のことを考えて、三つを行儀よく雁行させた。

さらに、おののの建物の先端に小刻みなジグザグを刻み込み、その部分をガラスによる雁行型の全面開口部とした。星は谷間の向こうに広がる様の塊が内部に、そして夜は内部の生活模様が外部に散乱する、プリズムのように散乱するはずである。

六浦の谷戸は明月谷の谷戸と違う。明月谷の環境は全てがネイキッドであった、周囲からの隔離度が高く、従って社会性を余り必要としない。裸で居ても構わない。六浦の谷戸は、そうはない。まわりの目が気になるのである。行儀よくキチッとしていたい、雁行させて、スッパッと切って、そしてジグザグを刻み込む、散々意識した結果である。

建築家は、建築事務所で建物を設計し、美的な配慮でそれを配置する。一方、自給自足の農夫は、手に入る材料を使い、独力で、その土地に代々伝わるやり方に従って家を建て、その土地に伝わるやり方に従って配置する。丁度、畑に種をまくのと同じことなのだ。イギリスの彫刻家デイビッド・ナッシュはこういう。

六浦谷戸計画はどうであったか……？ 畑に種をまき、発芽させる。タマゴが孵化するのと同じ現象だ。しかし一方では、行儀よくタマゴを生み付ける為には、建築事務所の机の上で色々試行錯誤をくり返す。タマゴは三つがよいのか、それとも四つがよいのか……。

発注者は設計者に対して四つ生むよう要求する。設計者は環境を考慮して三つを主張する。押し問答の末、タマゴは三つ生むこととなったのだ。「環境」という附加価値を付けて建物の価格を設定することによってやく一件落着となつたのである。しらとり・けんじ／建築家